

今月の特選句 八木健選

駐在に泥を吐かされ蜩鳴く (横山喜三郎)

「泥を吐く」などという隠語はひさしぶり。  
駐在さんは、「取り調べ」なんかしないから  
たまには泥を吐かせてみたいのかもしれぬ

春寒や歯科医てふ歯のセールスマン (川高郷之助)

これはもう最高です。やはり金に限ります。  
金が高騰してますからね。投資の意味でもお勧めです。  
身につけておけば安心ですし

春愁や宇宙にゴミのステーション (工藤泰子)

神聖なる宇宙に地球の連中がやってきてさあ  
使い古しを捨ててくんだなあ  
ステーションならいいけど 紙オムツなんかもあるからね

糸電話内緒話し漏れうらら (田中章子)

たかだか 三メートルぐらいの糸電話で相手の話が見えるわけだから  
内緒話はどうだかね  
おとなは秘密電話 こともは内緒電話の違い

人妻を泣かせどうする杉花粉 (西 をさむ)

これはちょっとばかり「意味深」という奴だな。  
杉花粉てえ奴は未婚既婚性別を問わぬ。  
なのに人妻を泣かせてどうするんだと西さんは言うが

出馬でも落馬と云わぬ夏競馬 (岡部一兆)

選挙の出馬てすな。夏の陣。落選したら落馬というべきだろう。  
というのが岡部さんの言い分。  
しかし、出馬は馬で、落馬は騎手だけ

今月の秀逸句 七七をつけてみました

おほかたは嫁の悪口粽結ぶ (可知豊親)

昔言われた嫁の古びて

**合格の電文だつた「サクラサク」は** (加藤澄子)

花の便りと勘違いした

**砂を吐く懺悔の如し浅蜷たち** (倉方 稔)

私は貝になりたくはない

**人類が馬鹿と化したる四月哉** (佐藤古城)

年中馬鹿を四月限定に

**国憂い雨後の筍党芽出し** (首藤虎男)

立ち上がれ党やこけるなの党

**藤棚に坐るあちらも同年輩** (山本 賜)

お召しものなど瞬時に比較

**甘酒けにくちびるこげてしまひけり** (中岡久美子)

貸したお金がこげつくよりは

**蛇穴に何度も戻る寒さかな** (久我正明)

あなた現場で見てきたのかい

**自己主張すれば噴水風に負け** (高田敏男)

スイッチオフで死刑にも遭ひ

**すれ違ひに美人と聞え四月馬鹿** (久松久子)

つけた「ふ」の字を聞きもらしてか

**春愁やがて食はるる親子豚** (小杉 隆)

栄養たつぶり霜降りの肉

**狐注ぎ狸受けをり花の宴** (金澤 健)

土筆摘み付き住宅として売れ

**鞆に尻の入らぬ母のいて** (伊藤浩睦)

メタボだなどと昔は言はず

青木冶敬

花冷えにしかめつ面の蕾かな

彼岸詣り懐き名の知らぬ顔

源氏とも競う日のあり幟立つ

青山桂一

臭ひ濃し雨の中なる栗の花

一面といふは無理でも麦の秋

軽鴨の遊弋しをり水張田

高田敏男

炎天やダリの時計の遊びぐせ

自己主張すれば噴水風に負け

肌脱ぎや昔の面影今は無し

高田菲路

比べ合ふ子らの一物菖蒲の湯

逃げ処無き校長?や草を刈る

水喧嘩後期高齢口達者

秋月裕子

子の頬はさくら散つてもさくら色  
天平の大鐘の声のどけしや  
大仏にみずかきありしと春惜しむ

麻生やよひ

春塵の隙見逃さず忍び込み  
カンニングを手柄のごとく四月馬鹿  
かけている眼鏡を捜す春愁

足立淑子

さよならが切ないほどの草いきれ  
夕凧やユダと言われている男  
寄せつけぬ海月のような男など

有富洋二

子らの声股間を抜ける潮干狩  
竿先の突き刺さっている夏の月  
皺連れて帰郷しました冷奴

有吉堅二

筍のもう竹の子といへぬ丈  
黄金週間隣の留守を頼まれる  
空へ逃れし風船のあかんべえ

安藤淑子

老夫婦浮世根問ひの春うらら  
春眠も暁を覚える加齢かな  
そちこちの病も芽吹く加齢かな

飯塚ひろし

飛魚の翼拵げてみて買はず  
先達が撫でし筍皆なでる  
葉桜や色々ありて今独身

井口寿々子

ほの暗きしげみに著莪の白さかな  
驚かすつもりもなくて蝌蚪ちらす  
藤垂るる太鼓橋まで人の波

井口夏子

虎枝を噛んでムンクの叫びなり  
身ひとつ何も求めず鳥帰る  
揚雲雀我も跳びたや籠の鳥

高橋マキコ

演説の声裏返る労働祭  
オヤジらの野球大会子どもの日  
黒光る良心市の長ナスは

高橋 都

春の闇やつぱり出会った沼の主  
ものの芽の動物めきて時を待つ  
漣は嵐のごとし蝌蚪寄りぬ

高橋素子

花びらの淫らにほどけチューリップ  
莖立ちの葱や坊主と呼ばれぬ  
闇の夜の闇より黒し蝌蚪の黒

高松雄三

花水木紅白並んで咲き競ふ  
しだれ桜暖簾のやうに振り分けて  
花びらの己を地球に描きけり

田中章子

初鯉ブリキのやうな顔をして  
糸電話内緒話しの漏れうらら  
花の散る道祖神には目鼻なし

田中勇

啄木忌我的手相を観てをるや  
図書館の梯子するなり暮れの春  
観音の立つの観じる溪?かな

種谷良二

蚕豆の殻の大山身の小山  
草笛や思ひ出せない曲の名を  
単身の帰宅迎へる夜の蜘蛛

田村米生

へそくりの場所替へをする春の夜  
春の夜の羊かぞへる不眠症  
なつかしや虫の図鑑の蚤・虱

飛田正勝

房總の山へへへへと笑ひけり  
一年に三寸伸びて進級子  
一つ家の二人にふたつ春灯

池田無了  
日替りの厚着薄着や春感う  
花の下眠る首なきテロリスト  
墓碑銘は月給四〇円なり獺祭墓

伊藤浩睦  
鞆に尻のいらぬ母のいて  
鞆に乗り血圧の乱高下  
公園デビュー今日は子どもの鞆記念  
日

稲沢進一  
日向にも咲いて日蔭つつじかな  
子供の日今日のカレーは甘口に  
誰にでも挨拶ばかりして登山

井野ひろみ  
新ごぼう炊き込みご飯香の高し  
土手の道黄のたんぽぽの目立ちおり  
暖簾下筍ざるに寝かされて

今城夏枝  
提防に子らのいさかふ花菖蒲  
春愁の仮の住まひに遊びみる  
この谷に散るほかはなし山桜

越前春生  
晩年の女友達更衣  
転職の日銭いくばく花菖蒲  
短夜をもてあましみる余生かな

奥脇弘久  
平成の今日の佳き日は昭和の日  
また探す眼鏡はいづこ目借時  
芽牡丹や枯れたとみせて焔立つ

岡部一兆  
長命菊冥土の土産仕分けする  
雨のロス男同志のキスうらら  
出馬でも落馬と云はぬ夏競馬

笠 政人  
香水の残り香ありし一茶蔵  
少子化の世情は知らず燕の子  
結着のはなから見えて鯉幟

中岡久美子  
甘酒けにくちびるこげてしまひけり  
ぼうたんに無情の雨となりにけり  
葉桜が笑ってあたり別れぎは

永井一朗  
茶摘女のテレビ撮りに紅をひく  
こけ猿の壺とも見へず古茶新茶  
茶を揉みつ虎造節のひとくさり

永島董玉  
地下鉄の円き柱に五月来ぬ  
夏燕袋小路を引き返す  
鯉幟ひねもす竿に掴まりて

西 をさむ  
人妻を泣かせどうする杉花粉  
亀鳴くと言われ万年黙秘権  
さくらさくら犬が片足上げ尿

原田 暉  
街へ出る蝶信号をわたりけり  
兜虫頭叩いて闘はず  
蟻の列殿のあり見届けん

彦阪義久  
予報士か予想師なのか初桜  
八畳の青シートだが花の間と  
衣食住足りて初めて長閑かな

久松久子  
すれ違ひに美人と聞え四月馬鹿  
青大将餓鬼大将に順へり  
子子を殖やす対策蚊帳メーカー

日根野聖子  
つくしんぼうの辛抱強さ立ちつくし  
摘草のための道草草の道  
入学児母の視線を逸れたがる

広瀬雅幸  
ガイジンを連れて花見の誇り顔  
旅に出て朝寝ばかりの体たらく  
新社員配属部署の名に怯ゆ

金澤 健  
狐注ぎ狸受けをり花の宴  
屈詫はもとより持たず芥子の花  
しんがりを皆嫌がりて蟻の列

可知豊親  
おほかたは嫁の悪口粽結ふ  
吹流し吹き流されてしまひけり  
天照らすほとやはらかき伊勢鮑

加藤澄子  
雪解けの雫に仔猫飛び上る  
際限のなし雲の雀のお喋りは  
「サクラサク」は合格祝ひの電文だつ  
た

加藤 賢  
さてどうするだ葉に垂るる蝸牛  
母の日や爺となりても母恋し  
?蛞を釣るに子よりも余念なし

川島智子  
花万朶老いらくの恋きかさるる  
春宵や思はず伸びる鼻の下  
葉桜や鍼のベットにはりついて

川高郷之助  
春寒や歯科医てふ歯のセールスマン  
菜の花のところに打てばホームラン  
徳利の一本分の余寒かな

北村真佐子  
どの顔もワンパクざかり葱坊主  
囀りの満ち溢れみる一樹かな  
ものの芽のかくかくしかじかなと言  
ひ

久我正明  
花見酒花びら浮いて濁り酒  
焼肉の煙見ている花見かな  
蛇穴に何度も戻る寒さかな

工藤泰子  
交響曲出出し静かに蝌蚪の紐  
蝌蚪の紐指揮者を誰にしたものか  
春愁や宇宙にゴミのステーション

藤岡蒼樹  
全方位風を操り鯉のぼり  
都都逸の十八番やをちの桐の花  
はくれんや渋滞に黒の霊柩車

藤森荘吉  
春風のおいたおぐしを乱します  
スヌーピーキティも一緒野に遊ぶ  
ペリカンのくちばしゆるむ長閑かな

藤原セツ子  
春一番季節の扉こじ開ける  
鶯のほこらしげなる羊山  
校庭に子等の声なしさくらサクラ

坊野留吉  
傘寿祝ことぶき未だ傘の下  
夏に入るわたし付たせて寝てる影  
春いづこ紛失届間に合はず

前川敏夫  
何もかもうまくゆき過ぎ春愁  
てふてふと一筆書きに蝶飛び  
隠しおおせぬ逃避行蝮の恋

松尾軍治  
介護びとアメとムチとの鵜匠かな  
葉桜も美しいよと妻みつめ  
根がかりに糠喜びの山女釣

松田吉憲  
検査着の糊のごはごは夏立てり  
妻の箸ひそかに使ふ薄暑かな  
何時見ても胸の揺れみる更衣

丸山紘一  
花六分団子喰ひて引揚げり  
古里は人の数より花多し  
花吹雪孤老は蠅を追ふがごと

三木蒼生  
股のぞきしてゐる美女の春帽子  
退屈の極みに亀の鳴きゐたり  
馬鹿殿のゐるやも殿様蛙かな

三塚不二  
春寒の人力車夫のストレッチ

食べ頃の過ぎたる筍てんこ盛り  
五月晴待合室の塞ぎ虫

倉方 稔  
対岸へ空母停泊蠅たたく  
マンションに目刺しのやうな鯉幟  
砂を吐く懺悔の如し浅蜷たち

黒澤正行  
野焼より戻りて猫に嗅がれけり  
子燕の回れ右してはじきけり  
ミニスカも短パンもいる田植かな

黒田忠一  
血圧の下が上越す四月バカ  
拳より遥かに大き辛夷咲く  
初音聞き夜の街へと俺は飛ぶ

小杉 隆  
春愁やがて食はるる親子豚  
銭湯の煙突高く一葉忌

酒井隆夫  
父の日や何事もなく春の暮  
剪定に一服もなき時世かな  
浪人の仲間も入れてクラス会

桜井宇久夫  
球春や大リーグより千葉ロッテ  
春雨に持ち主代るビニール傘  
蛇出づる山道急ぐ蛇嫌ひ

佐藤古城  
人類が馬鹿と化したる四月哉  
大股の妻小股の夫野にあそび  
睦まじく蚤の夫婦のまむし酒

佐藤義子  
もういいよ桜の蕾かくれんぼ  
手で覆い早く咲いてと願かける  
花吹雪花に見とれて鼻つぶき

佐野萬里子  
入学の子よりいそいそわが息子  
中学校入学式後はや部活  
宇宙にて春の再会逆立で

三橋一笑  
佳く響く蛙の声入れシャッターす  
漕ぎ手無く風頼みなる花筏  
舞ふ桜顔に命中するを待つ

谷むつみ  
蟻の列なんじゃもんじゃにたじろげり  
人の足目の前にある三尺寝  
金槌の沖に出たがる夏の海

村上美和  
春灯やピエロは影を引きずりて  
春水に押し切られたる立話  
蛤の焼く香煽いで商へる

百千草  
柏餅一たす一は都合六  
御佛の足裏かゆし茗荷竹  
来し方は亀の歩みよ遍路道

森 要  
花よりも団子潤す酒楽し  
花冷えに鼻冷えくしゃみハナが散る  
四月馬鹿四月抜ければ只の馬鹿

八木 健  
風の撥捌きの冴えてぺんぺん草  
恋猫の一直線の一途かな  
役立たず卒業証書の厚紙は

柳澤京子  
良い夫花の宴の酔い夫  
小鳥たち威嚇と恋の唄盛り  
ストーン・ストーン昔石やの初夏テニス

山内重昭  
胎内にマグマ滾らせ富士笑う  
日光はあと一駅や花菜漬  
待ち人はい未だ来たらず鉄線花

山ノ内杜士子  
少女3人素足6本聖五月

佐野ゆきこ

お喋べりが脳トレになる歳になり  
お財布にピン札一枚別れがたし  
生ゴミの通も居るかなカラス群れ

澤田鳥恵

長良川ギフトセットの鵜飼かな  
七変化聞かずもがなの地獄耳  
落ちゆく先未定でありぬ残る花

柴田真一

泡ふいて談合つきる二枚貝  
天然の宝探しや竹の秋  
春愁や火山灰におののく旅ガラス

清水吞舟

うららかや音痴を詫びるバスガイド  
子供の日施設の母に甘えけり  
蜷の道我が心電図見る如し

首藤虎男

花水木おしやれ名売り落しもの  
国憂い雨後の筍党芽出し  
世変り有為転変ホームレス

壽命秀次

筍に負けじ踊り子脱ぎ始む  
職安に卒業証書忘れ物  
ここだけの秘密弾むや花筵

白井道義

上座には花の新人花の宴  
なんとなく後ろめたきや春の風邪  
ふらここや又も変りし子の大志

杉村福郎

舌長き犬に舐められ万愚節  
散るさくら友の寝入らば顔へ散る  
永き日や吾は句会の主婦の友

鈴木和枝

ちよいの間に閉じたタンポポよ失恋か  
白いタンポポもある甘え方少し替える  
タンポポが笑っている話すのは今だ

検査の日脳を輪切りに薄暑かな  
くちばしのひそひそ話す花野かな

山下正純

蜀木瓜の寄りて火勢の一気なり  
見渡せど花菜菜の花なほ花菜  
過ぎ去りし時の香なりやフリージア

山本あかね

今日と決め地虫は穴を出でにけり  
下戸一人後は呑んべえ鳥雲に  
金ピカの大き仏壇麦青む

山本けい子

緑児のおむつゆらゆら葱坊主  
気の長い人となりたる花見かな  
リハビリの包丁の冴え野大根

山本 賜

北の春じょんがらぶしで発車せり  
藤棚に坐るあちらも同年輩  
蝙蝠の悪口なんて言つてない

横山喜三郎

乙女らの肩に軽々神輿ゆく  
駐在に泥を吐かされ蜩鳴く  
ぎりぎりに脱ぎマネキンの夏告げる

吉田恵子

鯉幟小さき窓から顔を出し  
待ってるよアケボノツツジに逢いに行  
く  
まな板を大きくはみ出す初鯉

渡辺さだを

松の芯わがチンポコの情なき  
菜種梅雨照る照る坊主べそをかき  
春睡や堂々めぐりする会議

渡邊美代子

秘めごとの二つ三つあり石路の花  
笋掘り足裏にやさしき合図あり  
一分を通して女房治まらず